

# 大学院理学系研究科長・理学部長に就任して



岡村 定矩（おかむら さだのり）

## 略歴


天文学専攻教授。平成3年より理学部教授。平成12-14年度東京大学評議員。専門は、銀河天文学/観測的宇宙論。銀河の定量分類、銀河・銀河団の構造と進化、観測的宇宙論（宇宙の距離尺度）、天体画像処理システムなどの研究を行っている。

東京大学理学部長  
東京大学大学院理学系研究科長

岡村 定矩

このたび佐藤勝彦先生の後を受けて大学院理学系研究科長・理学部長を相務めることになりました。任期の初めの一年は国立大学としての最後の一年、次の一年は国立大学法人としての最初の一年という、我が国の国立大学が経験する未曾有の大変革期に遭遇することはほぼ確実になってきました。理学系研究科の全構成員の皆様のご協力を得ながら、この変革の中で明るい未来へつながる種を少しでも蒔けるよう、微力ながら全力を尽くしたいと考えています。

われわれ大学院理学系研究科・理学部の教育研究を一言で言えば「自然の仕組み」を理解することです。今から約140億年前のビッグバンで誕生した宇宙の中で、元素が作られ、星が生まれ、多数の銀河ができました。その一つの銀河の中に生まれた星、太陽、その第3惑星に誕生したのが人類です。幸運なことに、奇跡ともいえる進化の結果人類は、このような世界の姿を認識し、それを生んだ普遍的な自然法則を理解する能力を獲得しました。この人類が獲得した能力を最大限に活用して、自然に関する素朴な疑問や驚きをそのまま学問へ、研究へ、さらには



感動へとつなげる役目を担っているのが理学部です。

新しい世紀に入ってはや3年が経ちました。20世紀は、科学の世紀とよべるほど、自然の仕組みの理解が飛躍的に進んだ世紀でした。その科学の成果に基づいて、人類の生活を便利で豊かにする様々な技術が開発され、生活様式が一変しました。その結果人類は、地球という天然の惑星の環境すら変えうる存在になりました。それはかつてどの生物種も経験しなかった事態と言えるでしょう。20世紀の後半には、技術開発が環境変化に与える悪い側面のほうが顕著になったために、「科学の発展は人類に益よりも害をもたらす」という見当違いの論理も台頭してきました。そのような論理がある種の説得力を持つほど事態は切迫しているのかも知れません。実際、これ以上の発展と繁栄を諦めたとしても、人類はこの惑星に悠久の生存を続けることが確実とは言えません。環境との相互作用が十分理解されていないために、今後人類に降りかかってくる事態を予測することは次第に難しくなっています。

理学部で学ぶこと、そして大学院理学系研究科で行われている研

究のほとんどは、研究者の多様な知的好奇心から発するもので、目先の応用を第一目的とするものではありません。そもそも「理学」という言葉は、自然科学の基礎研究分野の総称として用いられます。しかし、多くのすぐに役立つような応用研究のアイデアの源が基礎研究にあることも事実です。基礎研究はその意味では、応用研究を育てる畑といえるのかも知れません。一方で、基礎研究の中には、一見何の役にも立たないような研究も多数あります。私は、普遍的な自然法則の解明を目指す理学研究こそが、人類の将来に起こる未知の事態に対処できる知恵を、継続的に生み出してゆく源になっていると信じています。自然の仕組みをより深く知る努力を不断に行うことによってしか、人類の存続の展望は開けません。大学院理学系研究科・理学部の憲章の冒頭には、この「知の創造と継承」が高らかに謳われています。

理学研究の意義は、人類の物理的存続への貢献のみにとどまるものではありません。自然に対する探求心はまさに人類を人類たらしめる知の営みです。その知の営みの集積が我々の文化の重要な部分を形作っているのです。また、自

然の謎を少しずつ少しずつ明らかにしてゆくこと、そしてその営みに自らが参加できることに大きな感動を覚える人は少なくありません。理学研究にはこのように、芸術とは違った側面から、人々の心を奮わせて、感動と生きる力を与える役割もあるのです。

東京大学大学院理学系研究科・理学部は、理学における最先端の研究と専門的教育を通じた「知の創造と継承」によって、人類社会への貢献を続けて参ります。理学研究を発展させるには、研究者の多様な知的好奇心を大切に育てる以外に特効薬はありません。大学の枠組みがどのように変わろうともこの基本原則は変わりません。皆様のご理解とますますのご支援をどうかよろしくお願い致します。

# 評議員に就任して



和達 三樹 (わだち みき)

## 略歴


平成2年より、理学部教授。平成5年度、総長補佐。平成9-10年度、物理学科長、物理学専攻長。専門は、物性基礎論・統計力学。非線形波動や可解模型を中心に、相転移現象、結び目理論、ランダム行列、ボース・アインシュタイン凝縮、量子計算などの研究を行っている。

物理学専攻

和達 三樹

この度評議員に選出され、本稿を執筆することが初仕事となりました。東京教育大学光学研究所に6年、筑波大学物理工学系に2年、東京大学教養学部で10年、在籍し、1990年に物理学教室に移ってきました。偶然にも、研究所、工学部、教養学部、理学部とやや異なる複数の視点から大学を見る機会を持つことができました。大学人として、大変貴重な経験であったと思います。振り返ってみますと、この10年は大学にとって激動の時でした。実際には、これから10年の方がより大きな変化が起きると予想されます。そのような時期に、評議員という役割を勤めることの責任とその重要性を重く受けとめています。

理学系研究科では将来計画委員長を仰せつかっていますが、実はまだ委員長として一度も委員会を開いていない時点で本稿を書いています。昨年度は人事委員会委員を務めていました。そのなかで、法人化後はどのようになるのだろうか、という話題がしばしば登場しました。多分、他の委員会や各学科の教室会議でも同様な意見交換があったと思われます。気が付けば、法人化はもう目前に迫ってきています。決して自ら望んだことではありませんが、この機会



をよりよい方向への出発点として生かせるかどうか、は理学系研究科・理学部の将来をも左右することになります。伝聞や風説を含めて不確定要素がまだ多い現状ではありますが、適確な情報収集とともに早急に「法人化後の制度設計と運用組織」が検討されるべきであると考えています。将来計画委員会にとって正念場の検討課題であると認識しています。

昨年度は、小柴昌俊名誉教授のノーベル物理学賞受賞という素晴らしいニュースがありました。本学理学部卒業生としては、1973年の江崎玲於奈博士に続く快挙です。また、ノーベル化学賞では、3年連続で日本人研究者が受賞しました。暗いニュースが溢れるなかで、国民全体を元気づける出来事でした。ノーベル賞だけに注目が集まるのは必ずしも公平ではありませんが、着実に成果を積み上げてきた我が国の基礎科学研究がまさに国際的トップクラスにあることを示す分かりやすい証拠と言えましょう。ノーベル賞受賞に関する限り、この状況があと何年か続くことは確実であると思われる。ただし、それらの成果はあくまで“先輩達の遺産”であり、これから更に発展を遂げるための環境作りがぜひとも必要です。よう

やく花を咲かせはじめた基礎科学の研究が、真の意味で我が国に根づいて欲しいと思います。

大学も社会の一部であり、社会の変動と独立ではありません。大学においても、この10年間で色々な改革がありました。大綱化に伴う教養課程の見直し、大学院重点化などです。これらの総括が充分に行われないうちに、法人化、21世紀COEプログラムに対する準備が始まりました。この1～2年、多くの教官・職員は、それらの「中期計画」、「拠点形成計画」の立案、申請書類作成に忙殺されていたと思います。同様のことが、全国で行われていました。多量の書類作成や各種の評価報告への対応の中で、大学におけるアカデミックな雰囲気がなくなりつつあることに少し不安を感じています。また、中期目標の中にある「効率化」という言葉も気になっています。

現在大学に対して種々の要請が寄せられつつありますが、大学の基本的使命は、高いレベルの研究遂行と、それに基づく教育の実践にあります。理学系研究科・理学部の誇るものは、その秀れた人材であり、どのような変革が行われようとも、人材育成に力をそそいでいきたいと思っています。理科離

れ、学力低下が世間で言われるなかで多くの優秀な学生諸君が本研究科・本学部に進学していることに深く感謝しています。この状況に甘えることなく、若い人達にとって夢のある学究の場を提供し続けたいと考えます。

大学の運営には、教官・学生・職員間の信頼に基づく協力がぜひとも必要です。多くの難題が待ち受ける現状ではありますが、それらを乗り越える英知と活力が理学系研究科・理学部には充分であると確信しています。私自身もとより微力ではありますが、研究科長を補佐して理学系研究科のため東京大学のため尽力するつもりです。お気づきの点などありましたら、ぜひともご意見をお聞かせください。